

# 歴史 I

指導教官：黛 秋津

作成者：佐藤寛司

## 0. はじめに

初めに断っておくと、私はシケタイではない。ただ授業のまとめとしてなんとなく作ってみようと思いついた次第である。もちろん真面目な学生とは程遠いので、聞いていない箇所もあるかもしれないし、シケプリとしては不十分極まりないと思うが、要点はしっかりと押さえてある(多分)ので単位をとるのには困らないはずである。黛教官が講義を行ったバルカン史についてまとめる。(細かいミスは大目に見て...)

## 1. バルカンとは

### 1.1 呼称

バルカン半島の面積は約 66km<sup>2</sup>、人口は約 6600 万人である。日本の面積が倍に、人口が半分になったイメージだろうか。バルカンの語源はトルコ語で山の意を表す「Balkan」である。ツォイネーというドイツの地理学者が Goea という著書でその呼び名を提唱し、以後広まっていった。しかし、勘違いに起因する呼び名であることからバルカンでは次第に別の呼び名も模索されるようになり、「南東欧」という名も提案された。しかしこれも第二次世界大戦期にナチスドイツの勢力圏としてのイメージに結び付けられてしまった。一般的に、バルカン諸国はバルカンの呼称を避ける傾向にある<sup>1</sup>が、ブルガリアは例外的にその呼称を避けてはいない<sup>2</sup>。

### 1.2 地理的範囲

基本的にはドナウ川とその支流、**サヴァ川**が北限とされる。(左下図)しかし歴史的関係の深いルーマニアや旧ユーゴスラビア連邦のスロヴェニア<sup>3</sup>を含めることもある。(右下図)一方ハンガリーはオスマン帝国<sup>4</sup>の治下にあった歴史を持つが、含まれることはない。またルーマニアの一部であったモルドバも含まれない。



- 1 ルーマニア研究会の「南東欧研究所」
- 2 かつての国営航空会社、バルカン航空
- 3 文化的には西欧である
- 4 バルカン史において非常に重要な存在である

### 1.3 民族的多様性

6世紀の交通路では、西はドナウ川支流から、東はコンスタンティノープルまで東西の交通路が発達していた。一方南北の交通路には乏しかった。そのため追手を逃れるために南の山々に逃げ込む人々が断続的に現れた。追手は来づらいからである。その結果**多くの民族が混在**することとなった。具体的にどのような民族が訪れたのかは後に述べるが、ローマ帝国の支配から外れた後も残留したローマ系の人々によってラテン的風習が残っている。ドナウ河口のドブロジャ地方は特に多民族の雑居地として知られている。以下に民族分布図を載せる。

国名	主な民族
ボスニア	イスラム系、クロアチア系、セルビア系
ブルガリア	ブルガリア人、トルコ系
ルーマニア	ルーマニア人、ハンガリー系

(表 1)



(図 1)

また文字においても多様性が見られる。キリル文字は主にギリシャ正教圏、ラテン系の文字はカトリックであるが、例外的にルーマニアは正教圏だがラテン文字を使用している。<sup>5</sup> トルコもアラビア文字からラテン文字に移行した。<sup>6</sup>

<sup>5</sup> 19世紀まではキリル文字だったが、民族意識の高まりからラテン文字に移行した

<sup>6</sup> ケマル・アタテュルクが西欧化改革の一環で実行、アラビア文字は母音がなく不便

## 2. 視点の導入

20 世紀末にユーゴスラビア連邦(以下ユーゴと略す)の解体を機に、独立紛争が頻発し、民族浄化が行われたのは有名である。バルカンでそのようなことは今まであったのだろうか。ないとすればなぜ 20 世紀末になって発生したのか。そのような視点がこの講義を通しての大きなテーマである。そのために、1990 年代のバルカンを簡単に見てみよう。

### 2.1 ユーゴ紛争

1980 年にユーゴの指導者、ティトーが死んだ。冷戦終結後紛争の中心地となったのはこのユーゴであった。まず初めに起こったのが**スロヴェニア独立戦争**である。当時の一人当たり GDP を見てみよう。

	1980	1990
ユーゴ	17764	16820
スロヴェニア	<b>35320</b>	<b>33103</b>
セルビア	17453	17429
コソヴォ	<b>5000</b>	<b>4317</b>

スロヴェニアはユーゴの平均より高くコソヴォは低い。そのためスロヴェニアは貧しいコソヴォに富が流れていると考えたのだ。ユーゴの中核セルビアは豊かなスロヴェニアの独立を阻もうとした。しかしユーゴ連邦軍が出兵してからたった 10 日間で終結した。(十日間戦争)その理由としてスロヴェニアの民族構成が均一であったことが挙げられる。

一方で続く**クロアチア紛争**は長期化した。ナショナリストのトウジマンが大統領に就任すると、少数派のセルビア系が反発し紛争が長期化した。(91~95 年)セルビアでもクロアチア系を排斥する動きがあり、クロアチア軍が出動しセルビアに勝利した。紛争後クロアチア内のセルビア系の割合が 12%から 4%に低下したのは重要な事実である。

**ボスニア紛争**はさらに混迷を極めた。民族の混在度が高い<sup>7</sup>ことが理由の一つである。1992 年、独立を問う住民投票が実施された。当然独立派が勝つはずのためセルビア系はボイコットした。同年ボスニア・ヘルツェゴビナは独立宣言した。EC もそれを黙認した。しかし、セルビア系がスルプスカ共和国の独立を宣言し、セルビアの物資援助により一時優勢であった。国連、EU などが和平をたびたび提示するも失敗し、95 年 NATO 軍がセルビア人勢力に空爆を開始する事態となった。こうした中でスレブレニツァでムスリムの大量虐殺が行われた。最終的に Dayton 合意によって終戦を迎えた。ムスリム多数の地域はムスリムが、セルビア人多数の地域はセルビア人が統治することで合意し、国家元首は 8 か月で交代するとされた。

<sup>7</sup> ボシュニャク系(ムスリム)4 割、セルビア系(正教)3 割、クロアチア系(カトリック)2 割

次に起こったのが**コソヴォ紛争**である。コソヴォは中世のセルビア王国であった。ユーゴ治下では自治州であったが、自治に反対のセルビア人政治家、ミロシェビッチが現れた。セルビアはボスニア内戦によるセルビア人難民をコソヴォに送り、コソヴォ内で少数派からの脱却を目指した。アルバニア人がこれに大反発し、武装組織<sup>8</sup>が急伸長し、ゲリラ、市街戦が盛んにおこなわれた。国際世論はセルビアの抑圧を受けているアルバニアに同情的で、セルビアはNATO軍の空爆を受けた。2008年、コソヴォは独立宣言した。日本を含め国際的承認を得つつある。しかし、独立後の問題として高い失業率、産業基盤のなさが挙げられる。そのためEU加盟を目指している。

ティトの死を機に各国の利害対立が表面化し、ユーゴは解体したのだが、こうした民族対立は歴史的なものなのだろうか。ないとすれば、それは如何に抑制されていたのだろうか。

### 3. オスマン以前のバルカン史

古代、トラキア人と呼ばれる遊牧民が黒海周縁に居住しており、トラキア系のダキア人によってダキア王国も作られた。トラヤヌス帝によって滅ぼされた後、この地のローマ化が進み当時の遺跡が至る所から発見されている<sup>9</sup>。ローマとバルカンのつながりは意外と強く、軍人皇帝時代を終わらせ、専制君主制を開始したディオクレティアヌス帝<sup>10</sup>もバルカンのスプリット<sup>11</sup>出身である。またコンスタンティノーブル遷都によりバルカンの地理的重要性が増し穀倉地帯として首都の人口を支えた。その後ゲルマン人の大移動の影響を大きくは受けなかったものの、農耕民であるスラヴ人の侵入が進んだ。現在スラヴ人に広く使われているキリル文字は、東西教会の布教合戦の中でギリシア正教がスラヴ人への布教のために発明したものである。黒海の北に居住していたブルガール人もバルカンに侵入し、**681年**第一次ブルガリア帝国が成立した。10世紀末にはバルカンを覆うほどの大国となったが11世紀にビザンツ帝国<sup>12</sup>に滅ぼされた。中世にはモルダヴィア・ワラキアなどの独立国も生まれた。13世紀末の第4回十字軍のラテン帝国成立により、ビザンツ帝国は大きく弱体化し、14世紀には小国分立状態が生まれていた。つまり一度強大な勢力が現れると瞬く間に征服されうる状態と言え、そうした状況に乗じたのが**オスマン帝国**であった。

### 4. オスマン帝国時代

#### 4.1 オスマンのバルカン進出

まずはオスマンの起源についてである。イスラム教とトルコ人は中央アジア、特にトルキスタンで融合した。騎馬技術に優れていた彼らはマムルークとして軍事的に重用されるようになり、セルジューク朝時代にアナトリアまで西進した。アナトリアはビザンツとの国境

---

<sup>8</sup> コソヴォ解放軍、KLA、UCK

<sup>9</sup> イストゥリアの橋など

<sup>10</sup> 世界史選択者には身近であろう

<sup>11</sup> デイオクレティアヌスの隠棲時の宮殿が残っている

<sup>12</sup> 当時の皇帝はバシレイオス一世、捕虜に対し残虐であった

であるため、マムルークが多く駐屯し、様々なトルコ系遊牧民がそれぞれビザンツに対抗していた。オスマンはコンスタンティノーブル付近に勢力を持つ一戦士集団に過ぎなかったが、1299年ルーム・セルジューク朝から自立し、独自に征服活動を行うようになった。ブルサの支配から始まり、ペルシア人を招いて建国の助けを借りた。難攻不落のコンスタンティノーブルを避けバルカンに進出しようとしたムラト1世は1363年アドリアノーブルを占領し、バルカン征服を進めた。バルカン諸国の連携は非常に悪かったが次第に危機感を感じセルビアを中心にオスマンと戦争をした。これが**コソボの戦い**である。結果的にオスマンが勝利したもののムラト1世が戦死するなど双方に痛手であった。以降セルビアは19世紀まで独立することはできなかった。また戦場となったコソボは現在もセルビア人にとって聖地であり、この戦争のちょうど600年後にミロシェビッチがこの戦争の記念碑前でセルビア民族主義を鼓舞したことと無関係ではない。こうしてオスマンはバルカン南半を手に入れた。オスマン帝国はティムール軍に大敗し<sup>13</sup>、一度は壊滅したもののすぐに復興した。

#### 4.2 オスマン帝国の拡大

オスマン帝国は1453年**コンスタンティノーブルを攻略**しビザンツ帝国を滅ぼした<sup>14</sup>。メフメト2世は船を山越えさせるという大胆な作戦を実行し、敵の攪乱をあおって城壁を最新の大砲<sup>15</sup>で破壊した。なお世界史選択者はこの後イスタンブールという呼称がつけられたと覚えているかもしれないが、イスタンブールという呼称は以前から存在しており、コンスタンティノーブルという呼称も使用され続けたので、誤りである。通常征服した都市を3日間は略奪してよいという決まりがあったが、メフメト2世は都市の復興を早めるため1日に短縮した。アヤソフィアをイスラムモスクに改造し、トプカプ宮殿を建設するなどイスラム都市への改造を進めた。また一度はコンスタンティノーブルを離れたキリスト教徒やユダヤ教徒を時に強制的に移住させ、人口を回復させた。そのため異教徒が4割を占めるとしとなった。また異教徒商人は経済の基盤でもあった。これにより穀物供給地としてバルカンの重要性が一層高まった。穀物を運ぶ代わりに免税される階層が現れる一方、安い公定価格により農家は損をした。1475年オスマンはクリム＝ハン国を傘下<sup>16</sup>に収め北方の通商路を確保した。

セリム1世はチャルディラーンの戦いでサファヴィー朝からタブリーズを奪い、マムルーク朝を滅ぼし<sup>17</sup>、穀倉地帯エジプトと聖都メッカ・メディナを手にした。これにはイスラム圏を初めて征服したという歴史的意義がある。聖都を手にしたことでオスマンの宗教的権威は非常に高まった。今や、野蛮な戦士集団から覇権国家へと変貌を遂げたのである。

---

<sup>13</sup> アンカラの戦い、1402年

<sup>14</sup> 『コンスタンティノーブル陥落す』という文献に詳しく書かれている

<sup>15</sup> ハンガリーの医師ウルバンが開発、ビザンツに売ろうとしたが財力がなかったためオスマンに売却した

<sup>16</sup> 政体は温存

<sup>17</sup> アレッポでの戦いが重要

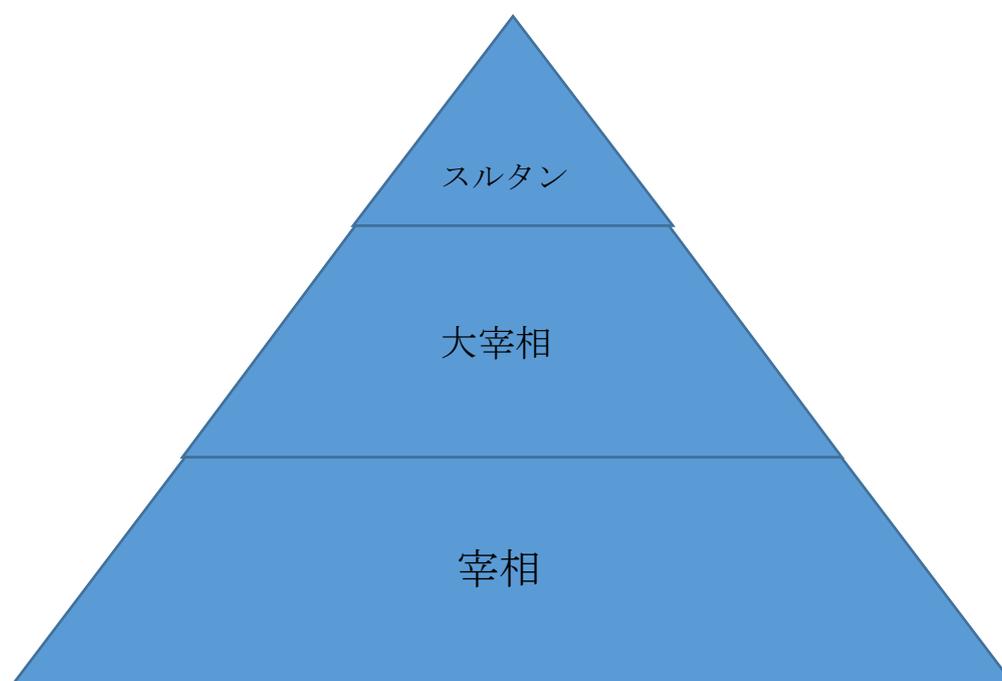
さらにスレイマン 1 世<sup>18</sup>はハンガリー征服を目指した。1521 年ハンガリー治下のベオグラードを攻略、またロードス島を拠点に略奪行為を行っていた聖ヨハネ騎士団を追討した。1526 年モハーチ<sup>19</sup>の戦いによりハンガリー征服を成し遂げ、29 年ウィーン包囲を行いヨーロッパに衝撃を与えた。またモルドバにも遠征した。

#### 4.3 帝国の国内統治

帝国の主な支配体制はスルタンによる一元支配とティマール制であった。

シパーヒーと呼ばれる騎士階層がスルタンから封土を与えられ、その土地の徴税権を得る代わりに軍事奉仕する義務が課せられた。封土には大規模、中規模、小規模の 3 段階があったが、大部分のシパーヒーは小規模の土地(ティマール)を与えられ、この土地の名称が土地制度の名称の由来である。土地は非世襲であり、勢力の土着化を防いだ。またティマール制実施のためには、見込まれる徴税額を把握する必要があり、土地測量<sup>20</sup>が定期的に行われた。地方の土地利用も詳細に書かれており、これに基づいて行政区分(州県郡)が作られた。財務官のみが理解できる字体で一種の暗号化を施されることもあった。ティマール制は主にバルカン、アナトリア、シリアなど中核地域で施行された。16 世紀の帝国は人口が増え、生産力が増加した。商業も盛んになり、都市が発達し、経済発展と社会の安定が実現した。バルカンの歴史観は帝国の抑圧下で民族の発展を阻害されたという見方が強い。しかしこれはナショナリズムを正当化するために作られた口実であり、史実と異なる。

次に支配組織についてである。



<sup>18</sup> イスラーム法による国家体制を確立した

<sup>19</sup> ベオグラードとブダペストの中間に位置

<sup>20</sup> 群の中の村の世帯数、人口構成、宗教また部族が記入された

スルタンによる一元支配の下で、直属の大宰相がスルタンの命令を実行する立場にあり、そのもとで財務長官、提督、法官長などの宰相がついていた。最高意思決定機関は御前会議であり、スルタンの御前で政策を議論するものであったが、スルタンは次第に大宰相に丸投げするようになった。カーディー(カドゥ)と呼ばれたイスラーム法長官が地方に派遣され、行政長官も兼ねた。スレイマン 1 世の時代に法制度と官僚制が整備され、イスラーム法に基づいて世俗法(カーヌーン)が多数制定されイスラーム法国家<sup>21</sup>としての体裁を整えた。

#### 4.4 異教徒支配

キリスト教徒、ユダヤ教徒は「啓典の民」とされ、改宗を迫られることはなかった。一定の制限に従いジズヤ(人頭税)を支払えば、信仰と自治が保障された。現在の基準では平等とは程遠いものであるが、信仰を認めるというシステムが存在したことは特筆すべきことである。国外からも異教徒を呼び込み、レコンキスタにより国を追われたユダヤ教徒が帝国に流入したのはその一例である。当時は民族という区別が存在せず宗教こそが第一のアイデンティティであった。イスラーム法の下で信仰の自由はよく保たれていたと言える。

一方でバルカン是人材供給地としての側面もあった。デウシルメ制と呼ばれる制度では、キリスト教徒の少年を連行し、イスラム教に改宗させ、地方でトルコ語やイスラム的な生活を教育した。親との縁を切られるので親は「血税」と称したが、才能を見込まれば宮廷の官僚になることができ、大宰相になるものもいたため、唯一ともいべき社会的地位の上昇のチャンスであり、積極的に子供を引き渡す親もいた。16 世紀以降は次第に別の人材獲得制度に取って代わられた。デウシルメ制により確立したのがイエニチェリと呼ばれる、スルタン直属の常備歩兵軍団である。

このようにオスマン帝国は場所によって多様な支配を行っており、土地制度から法律まで異なっていた。単一の基準で広大な領土を統治するのは不可能であり、柔軟にその土地に合った統治をしていたということができる。中核地域では先ほど述べたようにティマール制が施行されていた。周縁部には既存の体制を温存しつつ、中央から総督を派遣して管理した。既存の勢力を一掃するのは、非常にコストがかかるので合理的と言える。その意味で、ムハンマド・アリーのようにエジプトの мамルーク 勢力を一掃したのは偉業であったと言える。さらに地方では在地有力者を県知事に任命し、中央から官僚を派遣することもなかったためほとんど自治に近い状態であった<sup>22</sup>。また生産力も低く、あまり支配する意義のない場所<sup>23</sup>では税金のみを課してそれ以外ではほぼ完全な自治を認めた。また付属国(属国)<sup>24</sup>では既存の支配体制を温存し税金を課すのみであった。特にラゲーザ共和国には数年に一度徴税の使節が訪れるのみで、緩い支配であった。一方クリミア半島の先端部は軍事的・商業

---

<sup>21</sup> 以前はスルタン専制の軍事国家的性格が濃かった

<sup>22</sup> 東部アナトリアなど

<sup>23</sup> モンテネグロ、アルバニアの一部など

<sup>24</sup> クリム・ハン国、三ハン国、など

的に重要であったので直轄した。バルカン半島の支配も多様であり、19世紀の民族運動の多様性にも影響した。他方オスマン帝国は一旦ある国が恭順の意思を示すと属国とみなすので、帝国の定義が難しい。オスマンの外交範囲は東南アジアからヨーロッパに及ぶ広い範囲であり、それら全てをオスマン帝国とするのは非現実的である。

#### 4.5 16世紀のオスマン帝国(スレイマン以後)

スレイマン1世の下で拡大を続けてきたオスマン帝国であったが、1571年レパントの海戦<sup>25</sup>で、キプロス奪還を目指すヴェネツィア・スペイン連合軍に大敗した。この事件はオスマンの衰退の始まりとされることもある。スレイマン1世の死とも重なっており、また無能なスルタンが以後続いたことも事実である。しかし実際にはキプロスを保持しており、衰退とは言えない。また無能なスルタンでも国が機能するようになったという言い方もできる。衰退というよりは変化の始まりであり、この時代ティマール制に代わる新たな徴税制度が生まれた。

16世紀は大航海時代であった。新大陸から大量の銀が運び込まれ、価格革命という急速なインフレが発生した。しかしティマール制維持のための検地は数年に一回しか行われないため、徴税額が目減りしていきシパーヒーが困窮し、夜逃げするシパーヒーも現れた。そのため戦力となる兵士が減少したので政府は農民の徴兵を始めた。またシパーヒーのいない土地の徴税権を競売にかけ、落札した者を徴税請負人とした。この変化は合理的な面をいくつか持っている。ティマール制が維持可能であったのは戦争のたびに新たな領土が手に入っていたからであり、領土の拡大が止まった当時は何らかの変更を迫られていたと言える。さらに当時「軍事革命」によって銃・火器が戦争の中心となり、騎士は没落していた。徴税請負制では税金が直接国庫に入るの、それだけ直属の歩兵に軍事費を割り当てることができたのである。

#### 4.6 17世紀のオスマン帝国

レパントの海戦以後もオスマンは覇権を維持していた。1593年、オスマンがクロアチアを攻撃し、オーストリアと開戦した。この戦争中、トランシルヴァニア、ワラキア、モルダヴィアなどが独立を目指してオーストリアに協力する動きを見せた。しかし、三公国を統合したミハイ勇敢公が死亡すると、試みは挫折した。またポーランドがたびたび干渉してきたため、オスマンはポーランドに侵攻した。ホティンの要塞が特に激戦地であった。結果はオスマンの敗北であった。

ロシアでは16世紀後半にイヴァン4世の下で統治が強化されたが、彼の死後混乱し、ポーランドにモスクワを占領される事態も発生した。1613年にミハイル・ロマノフがロマノフ朝を創始し、混乱はようやく収拾した。その後、ウクライナのドニエプル川流域でコサッ

---

<sup>25</sup> 「ドン・キホーテ」の作者、セルバンテスも参加していた

ク<sup>26</sup>が独立勢力を形成し、それをめぐってポーランドとロシアが対立した。コサックの長はボフダン・フメルニツィキ<sup>27</sup>と呼ばれ、ポーランドに反旗を翻し自立し、オスマンへの帰属を表明した。黒海の対岸に位置するオスマンに臣従するのは非現実的であったため、ロシアとポーランドが戦争し、講和では東西に勢力圏を分割した。ウクライナ国内の民族的相違はここにその起点があると言える。ロシアとワラキアが関係を持つ時期もあったが17世紀後半まではロシアのバルカン進出は悉く失敗した。

転機は第二次ウィーン包囲<sup>28</sup>に始まる大トルコ戦争(1683~99)である。ハプスブルク・オーストリア内でハンガリー人が反乱を起こしたのを好機と見たオスマンがウィーンを包囲した<sup>29</sup>が失敗した。ヨーロッパ側はローマ教皇の呼びかけで神聖同盟を結成しオスマンに対抗した。ヴェネツィア、オーストリア、ポーランド、ロシアが参加しオスマンを取り囲んだ。神聖同盟側がバルカンの奥まで侵攻したこともあったが、オスマンも盛り返し戦争は長期化した。そうした中でルーマニアは独立を宣言し、オーストリアに使節を送ったが、ロシア強大化により次第にロシアに接近した。セルビアもオーストリアに協力し反乱を起こした。しかし失敗したためオスマン支配を嫌った多くのセルビア人がオーストリア領に移住した<sup>30</sup>。コソヴォの正教徒人口が希薄化したため、オスマンはアルバニア人を強制移住させた<sup>31</sup>。1699年によく終結し、カルロヴィッツ条約が結ばれた。オスマンが初めて多国間と結んだ条約であり、初めて大規模な領土喪失を経験した条約でもあった。

喪失した領土	獲得した国
ペロポネソス半島	ヴェネツィア
ハンガリー、トランシルヴァニア	ハンガリー
ポドリア	ポーランド
アゾフ	ロシア

次第にオスマンの勢力にヨーロッパやロシアが追い付いてきた時代であった。

## 5. 列強によるバルカン進出

### 5.1 18世紀前半

オスマン帝国は自らの権益を守るため次第に「外交」が必要になった時代である。ヨーロッパやロシアとの力関係が逆転し、それらによる**バルカン進出**が進められた。まずは同じ正教徒であるロシアが台頭した。ルーマニアがロシアと接近している状態がしばらく継続しており、続いて北方戦争(1700~21)を機に一時バルカンに進出した。北方戦争はロシアとスウェーデンがバルト海の覇権をめぐって起こした戦争である。ロシアがエストニアで大敗を

<sup>26</sup> 没落貴族や逃亡農民が軍事的共同体を形成した

<sup>27</sup> 二つの名前の読み方が板書されていたけど記憶がふわふわ

<sup>28</sup> 当時のスルタンはカラ・ムスタファ・パシャ

<sup>29</sup> コーヒーやクロワッサンがヨーロッパに伝来したという逸話がある

<sup>30</sup> 柴宜弘編『バルカン史』(新版世界各国史 18)、山川出版社、1998年、図版。

<sup>31</sup> コソヴォの民族的多様性の起源の一つ

喫したものの、その後ポーランドに軍を移動し、ポルタヴァの戦いでスウェーデンに大勝した。スウェーデン王のカール 12 世はオスマンに逃げ込み、それを機にオスマンとロシアが開戦した。その間、ロシア皇帝ピョートル一世とモルドバ公の間でロシアの下で独立国<sup>32</sup>を形成するという密約が交わされた。しかしプルート川の戦いでロシア軍はオスマンに包囲され、大金を積んでなんとか包囲を解かせたのを機に、オスマンとは休戦した。一方でオスマンは属国が次々と独立の動きを見せることを警戒し、地元の有力者ではなく中央から派遣したファナリオットに統治させることにした。ファナリオット<sup>33</sup>はオスマンに協力的な正教徒であり、コンスタンティノーブル総司教座に属する人々であった。その結果、自問と有力者の不満が高まったものの、一定の効果はあった。またオスマンは 1739 年からロシアからアゾフの一部を奪還する程度の実力を残していた。続く 30 年は外交努力により戦争は起こらなかった。

## 5.2 18 世紀後半

1768~74 年にロシア・オスマン戦争が起こり、オスマンが大敗した。講和条約の**キュチュク・カイナルジ条約**<sup>34</sup>はロシアのバルカン進出の本格化ともみることができ、東方問題<sup>35</sup>の起点とみられることも多い。キュチュク・カイナルジ条約ではロシアの獲得領土はわずかであったが、ワラキア・モルドバに対する発言権を得た。また正教徒の保護を自認し、オスマンへ圧力をかけるようになった。「オスマンはキリスト教徒を保護することをロシアに約束する」という文面を曲解して保護権を獲得したと主張し、正教徒はロシアのお陰で保護されていることになってしまった。さらにロシアは領事館をオスマン領内に自由に置くことになった。またロシアはクリム・ハン国を独立させ<sup>36</sup>、黒海の商業権や航行権を獲得した。史上初ロシアがドナウ沿岸に到達した事件であったため西欧、プロイセン、オーストリアがロシアを警戒するようになった。バルカン諸国の独立はロシアの影響下に入ることを意味するので、オーストリアとプロイセンは反発し妥協策としてポーランド分割を行った。他方、英仏はロシアの地中海進出を阻止しようとしヨーロッパ全体がこの問題に巻き込まれていた。ロシアはワラキア、モルドバをバルカン進出の足掛かりとした。特にモルドバ(?)のファナリオット、グリゴレ=ギガを終身の公にするよう要求した<sup>37</sup>。オスマンはモルドバへのロシアの進出を抑制するため、モルドバの一部のブコヴィナをオーストリアに割譲した。その後、ロシアはオスマン領内に領事館<sup>38</sup>を設置する戦略に変更し、ドナウ沿岸に多数設置

---

<sup>32</sup> カンテミール朝

<sup>33</sup> ファナル地区(イスタンブール)の人、の意

<sup>34</sup> オスマン語、ロシア語、イタリア語によって書かれた

<sup>35</sup> 1774~1923 と見られることが多い、M. S. Anderson の The Eastern Question が東方問題研究の一つの完成であるそう

<sup>36</sup> 翌年併合

<sup>37</sup> ここの話よくわからなかったけど出ないと信じてる

<sup>38</sup> 領事は主に通商関係を扱う外交官であり、政治・外交を扱う大使と異なる

した。地元の有力者とも関係を持ち政治的活動も行った。70年代はロシアを牽制していたオーストリアも80年代になると同盟を結んで協力した。さらにエカチェリーナ2世がクリミア半島を視察し、イスタンブールへの意欲を見せると、再びロシア・オスマン戦争(1787~92)が始まった。フランス革命により中断したものの、オデッサに軍港と交易港を兼ねた港湾を設置するなど黒海を手中に収めた。英仏領事館も革命後、次々建設されバルカン進出が進んだ。フランスもギリシア沿岸の諸島を入手しバルカンへの関心を高めていたのである。

## 6. 18世紀以降のバルカン社会

徴税請負人が終身となり、徴税権を購入したのち徴税と納税の差額で巨利を得た。ただし、彼らの多くはイスタンブール在住であったため、徴税代理人に徴税を任せた。徴税代理人は地方有力者(アーヤーン)であり、徴税の一部を受け取れたため富裕化した。彼らは農地開拓や農民への貸し付けを行い、小作人や保有農地を増やしていった。大農地で穀物や商品作物を栽培し得られた利潤で地方官職を購入した。先ほどのロシア・オスマン戦争ではアーヤーンの私兵が必要とされたため、彼らの自立化が進んだ。強力なアーヤーン<sup>39</sup>も現れ、その中での勢力争いも見られるようになった。帝国はアーヤーン同士の対立を煽り、彼らを抑制した。1808年、オスマン政府は「同盟の誓約」によりオスマンの風習を残しつつヨーロッパの軍事技術を取り入れる改革を行った。しかし反改革派がセリム1世を退位させ、ムスタファ4世を即位させたため改革は失敗した。改革派は政権奪取のためアーヤーンのアレムダル・ムスタファ・パシャの協力を得てイスタンブールに攻め込み成功させた。アレムダル・ムスタファ・パシャは大宰相となったが暗殺された。続くマフムト2世はアーヤーンから権益を奪っていった。これにわかりやすい解説があったので抜粋したい。

セリム3世の後継である皇帝マフムト2世は、改革を進めつつアーヤーンを政府の統制下に置く努力を払った。彼は政府に協力的なアーヤーンの子弟に要職を与えて政府に取り込みつつ、非協力的なアーヤーンたちに対して同盟関係の切り崩し、財産の没収、軍隊による討伐などを行って、短期間のうちにその大半を統制した。またこれと並行して進展した行政機構改革により、アーヤーンが地方社会において非公式に果たしてきた役割は政府が任命した役人にとって代わられた。ほとんど独立国家にも等しい勢力を誇っていたアーヤーンが短期に政府に吸収されていったのには、次のような理由が指摘される。

- 個々の家系の単位では、中央政府に武力で対抗するのが難しかった。

---

<sup>39</sup> テペデレンリ・アリー・パシャはヨーロッパとも接触した

- 彼らの勢力基盤は中央政府から賦与された徴税請負権にあり、地方社会における権威は中央政府の官職により保障されていたため、あくまでオスマン帝国の支配体制の枠内の存在であった。このため政府の権威を否定して独立を目指すことはできなかった。

徴税請負制の廃止は時間をかけて進められ、1839年のギュルハネ勅令で原則廃止された。(Wikipedia「アーヤーン」より抜粋、2016年7月13日)

しかし、庶民はアーヤーン同士の抗争に手出しできない帝国政府に不満を持ち、ロシアなどの列強の支配を望んだ。彼らはヨーロッパ伝来の新しい理念に基づいて独立しようとし、その理念こそナショナリズムであった。

## 7. 19世紀のバルカン民族運動の勃興

ナショナリズムについての簡単な解説をしよう。英語「nation」はラテン語「natio」（生まれを同じくするもの）に由来する。主権国家という、当時は西欧独特であった概念の下で生まれた、「共通の民族で単一の国家を作る」という主義、これがナショナリズムである。ナショナリズムが高揚した理由は先ほど述べたようなアーヤーンの台頭に加え、**正教徒同士の対立**もあった。

### 7.1 正教会内部の対立

イスラム圏ではまずイスラム教徒かどうか、次に一神教徒かどうかの問題にされ、課税もそれによって変動した<sup>40</sup>。宗教こそが第一のアイデンティティであり、民族の差はあまり問題とされなかった。4.4で述べたようにオスマンは自治を広く認め<sup>41</sup>、宗教内部の問題に深くは関わらなかった。正教会に限って話をすると、自治機関は主に教会であり徴税<sup>42</sup>とオスマンへの納税を行った。さらにコンスタンティノープル総司教座が正教会の元締めであった<sup>43</sup>。もちろんすべての教会が完全に総司教座に従属していたわけではなかった。17世紀になると、税制の変化だけでなくヨーロッパとの関係も変容した。ヨーロッパとの交易が盛んになるにつれて、ギリシア系を中心とする正教徒商人が力をつけ、首都には大商人も生まれた。彼らは商業を保護してもらうために総司教座に経済的援助を行った。総司教座とつながりのある帝国政府も大商人を保護し、代わりに大商人は財政を支えた。さらに西欧からカトリック布教の流れが押し寄せたため、総司教座は支配を強固にするため

---

<sup>40</sup> バルカンはギリシア正教徒が多かった

<sup>41</sup> 正教会、アルメニア教会、ユダヤ教に自治を認めた

<sup>42</sup> 住民がオスマンに直接支払う税金も存在

<sup>43</sup> ペーチ総主教座、オフリド主教座などは例外

にギリシア系聖職者をスラヴ圏の教会に派遣し、独立した教会も廃止された。そこでギリシア系聖職者とスラヴ人の間の言語的問題が民族的亀裂を生みだし、ナショナリズムの素地が出来上がった。西欧やロシアとの交易を進める中でギリシア人は自らが西欧文化の源流であるとの自負を抱くようになり、これも民族意識につながった。18世紀後半にはナショナリズムが受け入れられやすい環境が出来上がっていたのである。すなわち、諸外国の干渉、アーヤーンによる帝国支配の動揺、そして宗教的共同体から民族的共同体への移行である。こうして19世紀の民族運動の波が訪れたのであった。

## 7.2 セルビアの民族運動

コソヴォの戦いで敗北してからオスマンの支配下に置かれ、コンスタンティノーブル総司教座の傘下に入った。しかし16世紀にソコルル・メフメト・パシャが大宰相になると、ペーチ総主教座を復活させ総司教座から独立させた。また18世紀前半の約20年間オーストリアに支配された歴史を持つ。このように独自の歴史を歩んできたため、一つの民族的なまとまりとしての意識が生まれてきた。そこにペーチ総主教座廃止とギリシア系聖職者による支配が重なった。18世紀後半にイエニチェリが帝国防衛のため、セルビアに駐屯していたが、帝国支配の弱体化により彼らが略奪などで治安を悪化させた。1799年にはイエニチェリがベオグラードを占拠し、1804年にアーヤーンや聖職者を殺害する事件も発生した。横暴な振舞いをするイエニチェリに対して農民が蜂起し(第一次セルビア蜂起)、イエニチェリ討伐に成功した<sup>44</sup>。帝国政府は中央から総督を派遣したが、セルビアの権益が侵害されているとして再び反乱を起こした。当時オスマン・ロシア戦争(1806~12)が勃発しており、ロシアはセルビアを支援した。ロシアはナポレオンのモスクワ遠征の対応に追われて休戦し、セルビアとオスマンとの対話も実現するかと思われた。しかしオスマンはロシアとの休戦に乗じてセルビアの反乱を鎮圧した。1815年、第二次セルビア蜂起が起こり、ミロシュ・オブレノウィチは一定の自治を約束させた。1817年セルビア自治公国が成立し、29年には自治権の拡大に成功した。しかしオブレノウィチ家とペトロヴィッチ家の勢力争い、公と地方有力者の対立、ロシア・オーストリアの干渉など様々な障害に直面した。他面、民俗学者ウーク・カラシッチが国語を確立した。

## 7.3 ギリシアの民族運動

西欧との交流機会が他のバルカン諸国に比べて多く、古代ギリシア人の末裔としての自負を強めていた。19世紀、西欧で東方旅行、オリエントラベルが流行し、西欧でフィル＝ヘレニズム(親ギリシア主義)が高まった。フランス革命の影響もあってギリシア正教徒もフィル＝ヘレニズムに触発され、知識人を中心に独立運動が高揚した<sup>45</sup>。リガス・ヴェ

---

<sup>44</sup> ジョルジュ・ペトロヴィッチが司令官として活躍した

<sup>45</sup> アダマンティオス・コライスが代表的

レンスティンリスはギリシア中心のバルカン民族の連邦国家を構想した<sup>46</sup>。オスマン帝国外のオデッサで「フィリキ・エテリラ」(友愛協会)というギリシャ商人による秘密結社も生まれた。バルカン全土での一斉蜂起を計画したが非ギリシア正教徒が非協力的であったため失敗に終わった。

そこでギリシアのみの独立を目指す方針に転換しロシアの応援を期待した。1821年アレクサンドル・イプシランティス<sup>47</sup>率いる軍がルーマニアに南下し、ギリシアでもそれに呼応して反乱を起こした。しかし当時はウィーン体制の下でナショナリズムが抑制されており、ロシアは援軍を出さずイプシランティスの侵攻は失敗した。しかしギリシア本土での反乱は順調に進んでいた。当時オスマンはアレムダル・ムスタファ・パシャ討伐に尽力し手が回らなかったのである。そこでオスマンはエジプト総督ムハンマド・アリーに鎮圧を依頼した<sup>48</sup>。そのためオスマンが優勢となったが、彼らは時に残虐であったため、西欧国民がギリシア独立戦争に干渉するように求めた。イギリスはインド航路の確保のために介入せざるを得なかった。フランス、ロシアも加わりギリシアの独立は列強の利害によってゆがめられていった。



「キオス島の虐殺」

<sup>46</sup> 『ルメリ、小アジア、エーゲ海諸島およびモルダヴィア、ワラキアの住民の新しい政治制度』

<sup>47</sup> ロシアの軍人

<sup>48</sup> これがエジプト・トルコ戦争の遠因となった

独立宣言後、内部対立で複数の政府が立ったがムハンマド・アリーの介入で再び団結した。1827年ロンドン会議で英仏露がギリシアをオスマンの自治公国とすることを決定したが、オスマンはこれを拒否した。ロシアがオスマンに戦争を仕掛け勝利すると、オスマンはこの要求をのんだが英仏はロシアの勢力拡大を警戒し、1830年再びロンドン会議を開いた。そこではギリシアは世襲君主制<sup>49</sup>をとる独立国家とされ、ペロポネソス半島の小さな領域のみを領土とした。共和制を目指しペロポネソス半島を領土とする当初の計画は破綻した。そのため第一次世界大戦後にトルコに侵攻するなど領土拡大を度々目指したのである。トルコ共和国成立後、両国は領内のイスラム教徒と正教徒を交換し、完成度の高い民族国家を作り上げた。

#### 7.4 ブルガリアの独立運動

ブルガリアは首都イスタンブールに近く支配が強力であったため、民族運動の開始は遅れた。周辺諸国の独立につられる形で1876年によく始まった。18世紀後半から19世紀初頭にかけて聖職者パリシー・ヒランドルスキーがスラヴ語<sup>50</sup>で執筆するなど、民族運動の先駆となる動きが、教会を中心に見られた。ゲオルギー・ラコフスキーによる民族運動もあったが失敗した。公用語・俗語の教育機関が多数設置され、聖職者マカリオ・ポルスキーはコンスタンティノープル総司教座から独立しようとし、オスマンからその約束を取り付けた。1870年にブルガリア総司教代理座が生まれた。ブルガリア蜂起がオスマンによって鎮圧されると、列強の反オスマン世論が高揚し、ロシアが再び露土戦争(1877～78)でオスマンに勝利した。サン・ステファノ条約で大ブルガリアが成立したが、英仏がロシアの南下に危機感を抱きベルリン会議でブルガリアは1/3に縮小され、オスマンの保護領とされた。

(なお今日やった範囲はテストに出ないと言われたので以後聞かなかった模様)

## 8. 試験対策

ITC-LMS上に試験問題候補があるのでこのシケプリと突き合わせて解答を準備して来れば単位の心配はないと思います。試験問題は単なる調べ学習のようなものなので直前の準備でどうにでもなります(私ができるとは言っていない)。より解答の完成度を上げたい人にはこんな本もあるそうですよ。

- 柴宜弘編『バルカン史』(新版世界各国史18)、山川出版社、1998年。
- 柴宜弘『バルカンの民族主義』(世界史リブレット)、山川出版社、1996年。

ぱっと単位を取って自分の大学生活を楽しみたいものですね。怠惰な人にも優しい世界でありたい。

---

<sup>49</sup> ウィーン体制の影響

<sup>50</sup> 当時はギリシア語を用いるのが一般的であった